

民主革命後のチェコ・スロヴァキア

—歴史学と政治学の現状—

法学部 林 忠 行

今年の6月はじめから20日間ほどをチェコ・スロヴァキア(注)で過ごした。前回の訪問は1988年夏で、その印象記を「チェコスロヴァキア再訪の思い出」という題で本誌に掲載したのは昨年5月であった。前回は10年ぶりの旅であったが、その歳月の隔たりを感じなかった。それほど変化が乏しかった。しかし、今回はわずかに2年が経過したにすぎないのだが、その変容ぶりはあまりにも急で、戸惑うことばかりであった。すでにマスコミで広く報じられたように、昨年11月の学生デモに端を発した民主革命で、41年余にわたった共産党の一党支配体制が終わり、複数政党制にもとづく議会制民主主義が復活した。革命から半年が経過した今年の6月に自由選挙が実施された。今回この時期に訪問したのは、この選挙の様態を観察するためであった。チェコとスロヴァキアのいくつもの政党本部や選挙事務所をたずね、インタビューを行い、また数多くの選挙キャンペーン用パンフレット、ポスターなどを街で集めることができた。この選挙分析用の資料収集とならんで、もうひとつの重要な訪問の目的は、この国の歴史研究者との連絡を再構築することにあった。昨年末以降、この国は政治・経済・社会の大規模な再編成の過程にある。大学やその他の研究機関も同様で、10数年前に私が留学していたカレル大学(ブラハ大学)哲学部のチェコスロヴァキア史学科も例外ではない。ソ連の軍事介入以降に追放された数多くの教官たちが大学に復帰し、またそれまで大学行政の中心から遠ざけられていた非党員の教官たちが発言権を獲得し始めている。それにとも

なっていて、全面的な歴史の見直しが開始されつつあり、そういった動向について、復帰してきた歴史家たちと意見交換をする必要があった。以下では、革命後のこの国の歴史学、とくに近現代史および政治学が抱える問題を報告してみたい。14世紀からの長い歴史を誇るカレル大学は、ブラハ市内のいくつかの建物に分散しており、統合されたキャンパスをもたない。ヨーロッパの大学はそれが普通で、カレル大学の場合はブラハという都市全体をキャンパスとしている、ともいえる。同大学の哲学部(日本の文学部に当たる)は、旧市街地区のウルタヴァ(モルダウ)川に面したところにある。黒ずんだ重々しい建物で、入口はウルタヴァ川の対岸の丘にそびえるブラハ城と向き合っている。ブラハに到着した翌日、さっそく大学を訪問した。大急ぎで招待状を書いてくださったクヴァチェック教授に、なにはさておきお礼の挨拶をする必要があったからである。開き戸を押して建物の中にはいるとまず最初の驚きと感慨に出会った。入口の正面は登り階段になっていて、昨年まではその突き当たりの壁から、しかめっつらをしたレーニン像が学生たちを見おろしていた。しかし、扉をあけて中にはいって見上げると、そこにはもうレーニンはなく、替わってT. G. マサリクの半身像がおかれていた。マサリクはかつてこの大学の哲学講座で教鞭をとり、第一次世界大戦期には独立運動を指導し、初代大統領に就任した人物である。いわばこの国の議会制民主主義の象徴的存在ともいえる。この階段正面

の位置にもともとはマサリク像がおかれていたのだが、1948年の共産党による政権掌握後はレーニン像がここに据えられていた。レーニンからマサリクへ。この交替こそが今回の革命の内容を象徴している。

チェコスロヴァキア史学科の事務所でクヴァチェク教授との面会の約束をとり終えて帰ろうとしたところに、かつての指導教官であったN助教授が入ってきた。私はいわゆる「ブルジョア共和国」時代の研究に関心をもち、マサリクにかかわる論文なども書いていたので、当時の学科は私をあまり好ましい人物とは判断していなかった。そこで、きわめて思想的に堅固な(?) N講師(当時)が私の指導教官としてあてがわれた。N先生は当時は学科の主流で、肩で風を切って歩くという雰囲気があった。もちろん熱心な黨員であった。あまりにも型にはまった議論をするのでおもしろくなかったが、これも勉強と思って、毎週彼の研究指導を受けていた。彼は私を昼食に誘った。大学の近くのレストランへ向かう途中でN先生は「林さん、すべては終わったよ」と呟いた。もう、大学で自分の地位を保つことが困難と判断したN先生は自ら、地方の文書館での仕事を探し、そこに転出することにしたという。なんとも気まずい昼食であった。彼の同僚たちが同じレストランに何人かいたが、明らかに彼を避けている様子であった。翌朝クヴァチェク教授のもとを訪れた。留学時代も何回かわからない点を教えてもらったことがあった。しかし当時、彼は明らかに歴史学の主流からはずされていった。クヴァチェク教授はこの革命が「遅すぎたぐらいだ」と断言し、また歴史家らしくつぎの選挙を待たなければ本当の政治体制の変化は見きわめられない、という冷静な判断を示した。今、取り組んでいる仕事について尋ねると、高校生用の教科書を執筆しているとのことであった。ちょうど戦争直後の日本がそうであったように、これまでの歴史教科書、とくに近現代史の部分は全面的に書き直しが必要

であり、かつ緊急を要した。高校の先生たちが途方に暮れているからであった。

ともかくこの「表敬訪問」を終えて、選挙の取材に街にでようと廊下に出たところであると、クシェン先生と鉢合わせになった。クシェン先生は1960年代に第二次世界大戦中のロンドン亡命政権に関する大作を発表して、国際的にも高い評価を受けた歴史家である。しかし「プラハの春」の改革とのかかわりで、ソ連軍事介入後に大学を追われた。10数年前、紹介してくださる人があってひそかにクシェン先生にお会いしたが、そのときはたしか配管工として生計をたてていた。また「憲章77」に署名したことによって警察から日夜マークされているとのことであった。久しぶりに歴史を語ることができた、とうれしそうな先生の表情が今でも鮮やかに思い起こせる。しかし、同時にこのような知的抑圧状況が続けばチェコ文化は回復しがたいほどに衰退するとも語っていた。革命後、このクシェン先生も大学に復帰し、指導的な地位に就こうとしていた。選挙が終わったある日の午後、クシェン先生のお宅を訪問した。約束の時間に行くと、先生は申しわけなさそうな表情で、急に外務大臣から呼び出しがかかって外出しなければならなくなったが、それでも30分ほどはつき合えらるおしゃった。そこで私の質問はおもに、歴史学の現状に集中せざるをえなかった。歴史研究のこの20年間の空白は深刻で、とくに研究者側に問題があるとのことであった。クシェン先生たちの世代は定年まで間がなく、研究組織の立て直しで精いっぱい、ご自身が研究成果を出すことは不可能であり、また中堅の真に有能な研究者はクヴァチェク教授をはじめ何人かはいるものの、その数が足りず、また優秀な学生が制約の多い歴史学を嫌ったこともあり、かえって若手研究者の層が薄くなっている。また、歴史文書の整理が立ち遅れているのも研究の障害となっている。むしろ、西欧でこれまでに蓄積されたチェコ・スロヴァキア史研究の成果の方が水準が

高く、そこから学ばねばならない、とのことであった。クシェン先生の言葉は、あらためてこの20年の重みを思い起こさせるものであった。

先生は、車で私を中心街まで送ってくださり、そのまま外務省のあるブラハ城の方に走り去った。それを見送りながら、あらためて急速な時の流れを感じた。ついこの前まで警察に監視されていた人物が、今は外務大臣顧問として活躍しているという事実を目の当たりにして、「革命」というものを実感せざるをえなかった。でもこの「革命」はどこに行くのだろう。それは当のクシェン先生たちにもおそらくは分かっていない。そんなことを考えながら、旧市街の片隅のいつものピヤ・ホールで乾いた喉を潤した。「革命」を経ようと、この味だけは変わらない。だが、この前まで労働者であふれていたこの店も、すっかりきれいに改装され、まわりで聞こえるのは観光客のドイツ語ばかりであることに気づいた。あの仕事をさぼって飲んでいた労働者たちはどこへいったのであろうか。彼らは街の中心から追い払われてしまったのかもしれない。少なくとも、請求書にかかれた値段を見たときそう判断せざるをえなかった。

今回の旅で、もうひとりの印象に残る人物に出会った。ブラハに長く滞在した経験をもつS女史の紹介で、エチナー通りにある古本屋の主任、ヤロスラフ・イルサ氏に会うことができた。イルサ氏は1968年当時、カレル大学哲学部政治学科の助手であった。しかし、介入後は学科が廃止され、氏も今の職に移った。政治学科も今回の革命後に再興され、イルサ氏は古本屋の主任を兼任しながら政治学科の講師に復帰することになっていた。このような変化の激しい時期に政治を「対象」として見つめることはきわめて困難である。し

かし、イルサ氏はそういったことができる眼差しをもっていた。イルサ氏にとっても、またこの国の政治学にとっても、やはりこの20年間の空白は大きかった。大学に復帰するといっても、何を、どのように教えたらいいいのかわからない、と率直に語っていた。また、大学にはこの20年間に西欧で出版された政治学文献の蓄積がなく、研究と教育の両面で障害となっているという。

知り合いの政治学研究者に声をかけて、不要な政治学文献を集めてみるという曖昧な約束をしてイルサ氏と別れた。また、ひとつ宿題を抱えてしまった、と悔やみながらも、いくつかの研究会や学会で文献の寄贈と寄付金を募るささやかな運動を始めている（この件で関心のある方は内線2306までご連絡ください）。

20日間は瞬く間に過ぎ去った。夜行列車で通貨統合を直前にした東ベルリンに向かった。列車はすいていて、コンパートメントひとつを占領できた。座席に横になって、ブラハで出会った人々のことを思い起こした。人生の光と陰が激しく入れ替わるドラマをいくつもみた。それを前にして自分は何をどう語るべきなのであろうか。地域研究者としての真価が問われようとしている。そんなことを考え出したら、寝つけなくなった。列車に乗る前にもっとビールを買いこんでおくのだった、と悔やんだ。

(注) これまでの国名「チェコスロヴァキア社会主義共和国」は「チェコ及びスロヴァキア連邦共和国」と変更されたのにともない、一般的な呼び名もここではこれまでの「チェコスロヴァキア」ではなく「チェコ・スロヴァキア」を用いる。